

19世紀ハンガリー音楽における地域性の醸成

——「ハンガリー風」音楽はいかに受け入れられたのか——

Fostering Local Character in 19th Century Hungarian Music

—— The Way the Hungarian Style Music Was Accepted ——

横井 雅子
YOKOI Masako

外部者としてハンガリーに流入したロマが18世紀後半にジプシー楽団を形成し、国内のみならずヨーロッパで広く人気を博したことは比較的よく知られている。楽譜の読み書きも出来なかった彼らが全てのレパートリーを記憶し、卓越した技術でアンサンブルを成立させるさまは、楽譜を介しての音楽作りがデフォルトだった人々にとっては驚異であったに違いない。しかし、このことだけでは彼らが「ハンガリー風」音楽の仲介者となった力学を説明することはできない。また、彼らを取り次いだ音楽がさまざまな形で多様に親しまれ、人口に膾炙していったありさまはジプシー楽団だけに注目しても理解できない。「ハンガリー風」音楽がどのように広まるのか、どのような需要を生み出したのかを、ここでは初期の「ハンガリー風」音楽の著名な作り手であったラヴォッタ・ヤーノシュと関わる作品の楽譜の検証を通して跡付けた。

キーワード：「ハンガリー風」、ヴェルブンコシュ、ジプシー楽団、《ラヴォッタの初恋》

1. 研究の経緯

18世紀後半に当時のハンガリー北部で成立したロマたちによるジプシー楽団は、比較的短い期間のうちにハンガリー全土で知られるようになり、大きな人気を博した。それと共に彼らの演奏スタイル、技術的特徴、楽曲構成などを取り込んだいわゆる「ハンガリー風」と呼ばれる音楽スタイルがハンガリー国内のみならず、広くヨーロッパを席卷するにいたった⁽¹⁾。しかし、ロマたちが演奏に携わった音楽がなぜ「ハンガリー風」と受け取られ、また彼らがそもそもそれにどのように関わっていたのかという核心の部分が具体的に説明されることはほとんどない。また、貴族に演奏を提供する立場にあったロマ⁽²⁾が、ヨーロッパ音楽で標準的に用いられるヴァイオリンやベースの他に、ツィンバロム⁽³⁾、クラリネットを自らの楽団を構成する楽器として取り入れた経緯もはっきりしていないが、これらの楽器はいわゆる「ハンガリー風」の中で少なからぬ役割を果たしており、これらについての調査も不可欠である。

上記の問題に取り組もうという本研究に至るまでの経緯は以下である。

まず2006年に実施した資料調査があり、その概要については本学紀要第41集 (pp.143-154) に記した。ここではジプシー楽団最初期の1784年からハンガリーが第三帝国支配下に入る1938年までの1世紀半を対象とし、取り扱った資料は音楽の逐次刊行物のほか、文芸誌、ロマのハンガリーにおける受容を理解するための一般新聞と多岐にわたった。

この2006年とは別に、2017年に本学個人研究費（特別支給）により実施した資料調査があり、その概要は本学大学院研究年報第30輯 (pp.101-106) に記した。ここでは実質的なジプシー楽団の最初の名人ビハリに代表される初期のロマ楽師について、主に絵画や彫刻などの美術作品にあたり、そこからロマ楽師に対するイメージやそのイメージがハンガリーの一般的な生活の中にどのように浸透しているのかを読み解くことを試みた。

これらの調査と今回の研究との関係であるが、2006年調査はロマのハンガリーにおける受容の推移を文字資料から跡付けたものであり、2017年調査はそれを視覚芸術の領域から探ろうとするものであった。一方、今回の研

究は音楽そのものからこの受容を読み解こうとするものである。すなわち、現在も演奏される機会のある初期名人作とされる楽曲の楽譜を、複数の版を用いて比較し、そこに見られる幅や変化を検討することで、「ハンガリー風」の要素が形作られる様子を検討しようと考えた。さらに、上述の楽器の使用についても、年代を追っての実態を探ることで、音響上の嗜好の変化の把握をめざすことを考えた。

2. 本研究の方法

今回の研究では、ロマの楽師たちがいわゆる「ハンガリー風」と呼ばれるタイプの音楽において、いかに地域性の醸成に寄与したのかを、彼らの音楽そのものから明らかにすることを目的とした。そもそも何をもって「ハンガリー風」と呼び、ロマがそこにどのように関わったのか、「ハンガリー風」のスタイルがいかに確立されていったのかを、初期名人による楽曲の楽譜（多くの場合、後世の人の記譜による）の変化の推移と現行の演奏との比較によって検討し、併せて楽器の選択（ツィンバロム、クラリネット）の経緯も確認することを目指していた。

具体的な手法として、ハンガリーの国立セーチェニ図書館、同館音楽文書課、ブダペスト市内の音楽古書店での資料調査を2019年度内に実施した（9月2～7日のうちの5日間）。セーチェニ図書館と同館音楽文書課に関しては、セーチェニ図書館オンラインソースも活用し、必要な情報を取得できたため、事前に所蔵資料を把握することができた。一方、今回初めて取り組んだ音楽古書店での調査では初期名人の中古楽譜に精通した店員のサポートがあり、予想以上に幅広い楽譜の存在と現在においても流通している様子を知ることとなった。ただ、2019年9月調査時には日程に余裕がなく、古書店での中古楽譜を網羅的に検討する時間をとることができなかったため、翌2020年3月に私費による渡航で補足的な調査を実施することを計画した。しかし、この渡航は新型コロナウイルス感染症の拡大により、渡航中止勧告が発出されたため、実現することができなかった。

また、楽譜に見られる変化の推移と現行の演奏を比較するために、ハンガリーでジブシー楽団演奏家への聞き取りとデモンストレーションの機会をもつことを検討していたが、これも上述の古書店調査と併せて実施することを検討していたため、実施に至らなかった。ただし、これについては手持ちの音源資料やネットワーク上で公開されている音源資料を活用することにより、実際の演奏のしかたなど、演奏習慣に近づくことを可能な限り試みた。

ツィンバロムとクラリネットが選択されるようになった経緯については、資料調査に予想以上の時間を必要としたため、3月渡航中止を決定する以前の段階で2019年度中での調査は断念し、次の機会を待つこととした。

3. 楽譜資料調査について

2019年9月2日から7日まで国立セーチェニ図書館、同館音楽文書課、ブダペスト市内の音楽古書店において、およびその前後にセーチェニ図書館オンラインソースを用いて実施した資料調査の概要を以下に記す。

ジブシー楽団によって取り次がれてきたハンガリーの大衆音楽の変遷をたどり、ロマたちが演奏に携わった音楽がなぜ「ハンガリー風」と受け取られたのかを探るために、今回はハンガリー風音楽として早くから知られてきたヴェルブンコシュ verbunkos の創作における「三大名人」として知られるビハリ・ヤーノシュ Bihari János (1764-1827)⁽⁴⁾、チェルマーク・アントル Csermák Antal (1774頃-1822)⁽⁵⁾、ラヴォッタ・ヤーノシュ Lavotta János (1764-1820)⁽⁶⁾ との関わりの中で作られた楽譜と関連資料を中心に調査した。この3人は出自も異なり、生前の活動についての確証の有無等にもかなりの違いがあり、「三大名人」と一括りに論じるのが難しい様相が

ある。とりわけビハリはロマの出自であったため、正式な音楽教育を受けていないにもかかわらず、卓越した演奏で当時の人々を驚かせた一方で、演奏していた（おそらく）自作の（と考えられる）曲に関しては、本人自身の記譜によって残されたのではなく、聴き覚えた同時代人、あるいは後の時代の人々によって書き記されているため、どの程度、当時の姿をとどめているのかを確認することは難しいが、曲によってはビハリの生前に既に出版されていたものもあり、手稿譜と出版譜合わせて78曲程度と見られている⁽⁷⁾。他方、チェルマークとラヴォッタは彼ら自身が楽譜に作曲し、生前に出版された曲も少なくないため、チェルマークやラヴォッタの作品として今日残されているものの大半は本人の作であることを確認することができる。もちろん、本人以外の手になる編曲も数多くあり、また手書きの複写譜もあるため、本人の目の届かない楽譜も存在しているが、ビハリとは自ずと状況が異なることが理解できる。

今回の調査では、3人ともが存命であった19世紀初頭の手稿譜、手書きの複写譜、出版譜を皮切りに、ヴェルブコシュやチャールダーシュといった器楽のハンガリー風舞曲が一世を風靡する19世紀中頃以降、大衆歌曲マジダル・ノータがもてはやされる20世紀初頭にかけてのこの3人に関わる楽譜を、いくつかの作品に絞って検討した。夥しい数の楽譜が流通していた時代であり、網羅的に調査することは不可能であるため、この方法を選出した。

この中でラヴォッタと（間接的に）関わる形で世に出て、現在にいたるまで演奏し続けられてきた《ラヴォッタの初恋》と題された作品をここで例として取り上げる。調性は編曲によって複数あるが短調で、繰り返しを除くと24小節+コーダの形が多く、“Lassan, ábrándosan（ゆっくり、夢見がちに）” “Ábrándosan（夢見がちに）” “Lento” “Adagio lamentoso” “Lassan（ゆっくり）” “Molto andante” といった速度、曲想を示す用語が付されている。Lamentosoの語が見えるところからも、「夢見がちに」という用語が決してポジティブな印象ではなく、むしろ「悲しい思いにふける」という程度の意味をもつと考えてよいだろう。全体的に憂いに満ち、とりわけジブシー楽団はこの曲で習慣的にルバートを多用して拍節感を曖昧にして演奏することが多い。その点では、いわゆる「ハンガリー風」と称される音楽のうちの「哀愁に満ちた」イメージと重なり合う曲である。

実際にはこの曲はラヴォッタの手によるものではないが、ラヴォッタ作とされたために有名になり、大衆音楽の域を超えてリストがその作品の中に複数回にわたって用いるほど人々に親しまれてきた。後述するように、この曲を手掛けたコッショヴィチは「三大名人」のようなパイオニアでもなく、音楽家としても一流の人物であったとは言いにくい。この曲についても、傑出している訳でもなければ、愛国的な感情と結びつくエピソードを有している訳でもない。しかし、そのような曲がラヴォッタという初期名人と誤って結び付いて世に出たことがきっかけで、さまざまに編曲され、異なる歌詞を付けられ、220年以上にわたってハンガリーで愛されたのである。《ラヴォッタの初恋》のケースは、有名無名の夥しい数の音楽家が生み出した星の数ほどもあろうかという小曲が、その作り手の意図や脈絡と関わりなく「ハンガリー風」音楽のパーツとなっていくありさまを象徴しているように感じられる。以下はこの曲とその楽譜についての報告である。なお、「5. 楽譜調査の詳細」においては、この楽曲に付されたいくつかの題名が登場するが、それまでは便宜上、《ラヴォッタの初恋》の名称で統一して記述する。

4. 《ラヴォッタの初恋》の背景

19世紀中盤にハンガリー音楽界に強い影響力をもち、多種多様なハンガリー音楽の手稿譜を所有していたファーイ・イシュトヴァーン伯爵 Fáy István (1809?-62)⁽⁸⁾ は、ラヴォッタと交流のあった人々からラヴォッタの手稿譜も入手し、相当数を手元に置いていたことが知られている。しかしファーイが「ラヴォッタの作

品」として出版したのは1曲のみである。それが今回の考察の対象とした《ラヴォッタの初恋 Lavotta első szerelme》である。

《ラヴォッタの初恋》は以下で取り上げた楽譜からも明らかになるように、複数の名称で知られている作品である。この曲は現在でもジプシー楽団が演奏する機会があり、220年以上にわたってハンガリー人に親しまれてきた。ファーイはラヴォッタの作品として出版しているが、もともとはコッシュョヴィチ・ヨーゼフ Kossovits József (1750以降-1819?)⁽⁹⁾が1794年に作曲したもので、最初にファーイが誤ってラヴォッタ作品としたために、この混同は現在に至るまで見られる⁽¹⁰⁾。

コッシュョヴィチ自身について、この曲の作曲と普及の経緯をたどっておこう。

コッシュョヴィチ・ヨーゼフの詳しい経歴については分からない部分が多いが、1790年代にゼンプレーン城県でスヨフスキ Szulyovszky 家の宮廷音楽家であったこと、のちにカッシャ（現在スロヴァキアのコシツェ）に移り、1806年に王位継承者のためにカッシャの劇場で企画されたガラコンサートで指揮をしたこと、1818～1819年にアンドラーシ伯爵夫人に音楽を教授していたこと、チェロの的高手であったと同時に、ハンガリー的な作品を手掛けていたことなどが分かっている⁽¹¹⁾。

この曲の経緯についてはいくつかの説があるが、ここでは複数の説を総合している *Zenei Lexikon 2* (Boronkay, 1984) の記述に拠って紹介することとする。

コッシュョヴィチについて不明な点が多いにもかかわらず、作曲当初についてははっきりとした記録がある。この曲は彼がスヨフスキ家に奉職していた1794年12月14日に作ったことが知られている。その後、旋律だけの形で1800年頃にウィーンで出版された *Danses Hongroises Pour le Calavecine ou Piano-Forte* というタイトルのシリーズの中の1曲として発表された。1803年にハンガリーの著名な詩人であるチョコナイ・ヴィテーズ・ミハイ Csokonai Vitéz Mihály (1773-1805) の「希望へ Reményhez」と題された頌歌（1803年出版）の詩“Földiekkel játszós égi tünemény 地球人と遊ぶ天体現象”が付けられた。

作家、詩人で言語改革者でもあったカジンツィ・フェレンツ Kazinczy Ferenc (1759-1831) が記したところによれば、この曲は後に（すなわち1803年以降に）ファーイ伯爵のコレクションの中で《ラヴォッタの初恋》として発表され、よく知られるようになったとされる。リストもこの曲の旋律を3回用いたことが確認されているほか、*Hongroises*、*Hongroisse*、*Serenata* 等の名称で作曲者の名前の記載が無いさまざまな器楽編成の手稿譜も残されている。

20世紀に入ってからこの曲はさまざまに扱われた。ヘルツェグ・フェレンツ Herczeg Ferenc による戯曲「オチュカイ准将 Ocskay brigadéros」(1901年初演)では、新たに《ティサの家の前での夜明けのセレナード Hajnali szerenád a Tiszaház előtt》のタイトルが付けられた。1930年代に大衆歌曲マジャル・ノータが全盛期を迎えると、《愛しい人の心よ、もっと夢見よ Álmodj még csacsi sziv tovább》(作詞ナードル・ヨーゼフ Nador József)、《月夜 Holdas éj》(作詞ヘロデク・シャーンドル夫人 Herodek Sándorné)、《ラヴォッタの恋 Lavotta szerelme》(作詞シャルヴェル・ベアラ Salver Béla。楽譜④についての記載を参照)などの新たな歌詞によって広く親しまれた。なお、音源資料(CD、インターネット上に公開されている音源・動画)を調べたところ、いずれの歌詞の録音も残されており、この曲がマジャル・ノータとしてさまざまに享受されている様子を跡付けることができた。

上記の経緯の一部は、以下に示す今回の楽譜資料の調査によって確認することができる。

5. 《ラヴォッタの初恋》楽譜調査の詳細

ここで取り上げるのは20世紀初頭からおよそ1世紀の間に出版された《ラヴォッタの恋》の印刷譜についての詳細である。出版年が不明のものが大半であるが、楽譜裏面の広告や価格などの付随的な情報から判断し、およそその年代順に配置した。

① *A százévek zenéje. Lavotta szerelme*. Budapest: Glória kiadótársaság, 1917.

ラヴォッタの曲集で、A reményhez、Lavotta szerelme、Gyere be hát...、Sóhaj, te bús madár、Csepp, cseppの5曲から構成される。Lavotta szerelme以外の曲はすべて歌+ピアノのスタイルだが、Lavotta szerelmeのみピアノ独奏用編曲（e moll）。なお、この曲集の第1曲は原曲とも考えられるチョコナイの詩による《希望へ A reményhez》が掲載されており、《ラヴォッタの恋》と比較することができる。

A százévek zenéje は楽譜シリーズの名称で、裏表紙にあるシリーズの広告によれば、毎月5日と20日に新しい曲集が発行されていた。なお、この広告を含め、タイトル、歌詞など全てハンガリー語とドイツ語の2言語表記となっている。

② *Magyar zenei ereklyék. A régi magyar zene kincseiből 1672-1838. Thököly és Rákóczi korabeli Kurucz nóták*. Szerzeményi új könnyen játszható művészi átiratban szerkeszti Huber Sándor⁽¹²⁾. Budapest: Rozsnyai Károly Könyv- és zeneműkiadóhivatala, n.d.⁽¹³⁾ (図1)

タイトルは「ハンガリーの音楽遺産。ハンガリー音楽の古い宝庫より 1672-1838年。テケリとラーコーツィの時代のクルツ⁽¹⁴⁾の唄」の意。ここに登場する名前のテケリ・イムレ Thököly Imre (1657-1705)、ラーコーツィ・フェレンツ 2世 II. Rákóczi Ferenc (1676-1735) はいずれも反ハプスブルク蜂起に関わった人物で、愛国的な脈絡で取り沙汰される人たちである。全84ページ+広告で構成されるこの楽譜には、《ラーコーツィ行進曲》のモチーフとなった《ラーコーツィの唄 Rákóczi-nótá》、当時の人口に膾炙した4曲のクルツの唄に始まり、比較的愛国的なタイトルを有する曲が最初の方に配置されているが、それに続いて8人の手になる（と考えられていた）大衆歌曲のマジャル・ノータ33曲が収められている。この8人の中にはジプシー楽団の祖とされるツインカ・パンナ Czinka Panna (1711?-1772)、内外の著名な音楽家や王侯貴族の前でも演奏したビハリ・ヤーノシュ Bihari János (1764-1827) といったロマの楽師と、ラヴォッタを含む著名なマジャル・ノータ作曲家が含まれる。

この楽譜では Lavotta első szerelme はラヴォッタ自身の作品の1曲（1786年作）として扱われ、歌詞のつかないピアノ用編曲版である（g moll）。欄外にはこのタイトルへの注記として、“Az „Ocskay brigadéros”⁽¹⁵⁾ színműben „Hajnali szerenád a Tiszaház előtt” címmel van felvéve（「オチュカイ准将」という舞台作品では「ティサの家の前での夜明けのセレナード」のタイトルで表記されている）”と記されている。

③ *Lavotta első szerelme. Magyar szerenád hegedűre és zongorára átirta Zsadányi Armand*. Budapest: Rózsavölgyi és Társa, n.d.⁽¹⁶⁾ (図2)

この曲単独のピース譜で、ヴァイオリンとピアノ用編曲（d moll）。編曲者はジャダーニ・アルマンド Zsadányi Armand⁽¹⁷⁾ である。

この楽譜の裏表紙にあるシリーズの広告によれば、ジャダーニの最新のヴァイオリン+ピアノ編曲として、初期名人のビハリ（2曲）、ツインカ・パンナなど合計6曲の最初数小節分の楽譜が示されている。



図1 ピアノ伴奏つき歌曲譜 (②)



図2 ヴァイオリンとピアノ用編曲版 (③)

④ *Szól a néma I.kötet. 55 magyar néma énekhangra és zongorára.* Budapest: Zeneműkiadó, 1958.

全55曲から構成されるハンガリーの大衆歌曲マジャル・ノータ Magyar néma の歌曲譜（ピアノ伴奏つき、Ha Szólnak újra a trombitákの歌い出しによる歌詞）。16曲目（18～19ページ）として Lavotta első szerelme が掲載されている（d moll）。同作品はこの楽譜ではコッショヴィチ作曲となっている。タイトル下にはシャルヴェル・ベラ Salver Béla（1893-1978）、デーヴェーニ・イエネー Dévény Jenő（1903-1904）の名前が記されている。シャルヴェルは大衆歌曲の作詞者として知られる。デーヴェーニは指揮者、作曲家だが、ここで特筆すべき点は、1954年から Zeneműkiadó Vállalat⁽¹⁸⁾において軽音楽部門の編集者だったことである。とりわけ彼はこの分野で楽譜シリーズの発行に力を注ぎ、この歌曲譜 *Szól a néma* 第1巻は彼自らが編纂している。この2名の役割は明記されていないが、この曲集の他のタイトルに挙がっている人名、その表記位置などから判断して、ここではシャルヴェルが歌詞を書きおろし、デーヴェーニが編曲したと推測できる。

⑤ *Kossovits-Kun Szerenád a Tisza-ház előtt (Lavotta első szerelme).* Millenium Series. Budapest: Edition Neuma, n.d.

大衆音楽の楽譜を精力的に出版している Edition Neuma によるもので、楽譜の状態からリプリント版ではないかと考えられる。この楽譜は弦楽四重奏用の編曲である（g moll）。タイトルは表紙にもあるように、「ティサの家の前でのセレナード」がメインタイトルであり、Lavotta～のタイトルは（ ）に入れて付記されている。

内表紙裏にあたる2ページ（スコア譜の最初のページ）には、欄外にアスタリスク*で、

Bartalus gyűjteményében: „Földiekkel játszó égi tünemény” (zenéje: Kossovits-tól)

(バルタルシュのコレクション《地球人と遊ぶ天体現象》(メロディはコッショヴィチによる))

Káldy Gyulánál: „Lavotta első szerelme” (zenéje: Lavottától) cím alatt fordul elő.

(カールディ・ジュラにより、《ラヴォッタの初恋》(音楽はラヴォッタによる)のタイトルで発表された)

との記載がある。

タイトルにある「コッショヴィチとクン」は、原曲コッショヴィチ、編曲がクン・ラースロー Kun László（1869-1939）⁽¹⁹⁾であることを示している。

⑥ Kossovits József *Lavotta első szerelme* (Bihary Z.) két hegedű-zongora. Budapest: Edition Neuma, n.d.

これも Edition Neuma による現代の楽譜である（リプリント版か）。ヴァイオリンとピアノ用の編曲で、ビハリ・ゾルターン Bihary Zoltán⁽²⁰⁾ による（g moll）。

⑦ *Lavotta Album hegedűsöknek*. Budapest: Edition Neuma, n.d.

ラヴォッタの作品を集めた楽譜で、これも Edition Neuma による現代のものである。全15曲が収められている⁽²¹⁾。ヴァイオリン・ソロ用の編曲だが、編曲者に関する記載は無し。同曲は《Lassú magyar. Első szerelem (ラッシュュー・マジヤル。初恋)》のタイトルで掲載されている（d moll）。なお、この楽譜での最大の特徴は、Lassú magyar、すなわちトランシルヴァニア地方に典型的な舞曲の名称が付された、これまで挙げてきた楽譜と共通の旋律の曲の後に《Friss 1. Doppler⁽²²⁾ (フリッシュ1。ドップラー)》(Allegro) および《2》(Vivace) という別の曲を配置されていることである。Molto Andante である前半とこれらを続けて演奏することで、緩（一急）一急というハンガリーの典型的な舞曲のスタイルが構成されるようになっている。この地方では Lassú magyar は堂々とした男性舞踊であり、その後に軽快な娘たちの輪の舞踊ないしカップルの踊りを繋げるのが普通である。このような構成でハンガリーの舞曲のスタイルとなるような楽譜を提供しているのは、今回集めた中ではこの一つだけだが、実際にはジプシー楽団が《ラヴォッタの初恋》の旋律だけを演奏するケースだけでなく、この曲より速い曲を繋げて演奏して、ハンガリー風に構成するのが常套手段であり、この楽譜はその演奏習慣を反映しているとみなすことができる。

上記の詳細のデータを比較しやすいように表にまとめたのが以下である。

楽譜タイトル	楽曲名	作曲者名	編曲者名	出版社	出版年	演奏形態	備考
A százévek zenéje. Lavotta szerelme.	Lavotta szerelme	Lavotta János	記載なし	Glória kiadó társaság	1917	ピアノ独奏	
Magyar zenei ereklyék. A régi magyar zene kincseiből 1672-1838. Thököly és Rákóczi korabeli Kurucz nóták.	Lavotta első szerelme	Lavotta János	Huber Sándor	Rozsnyai Károly Könyv- és zeneműkiadóhivatala	n.d.	ピアノ独奏	
Lavotta első szerelme. Magyar szerenád hegedűre és zongorára átírta Zsadányi Armand.	Lavotta első szerelme	記載なし	Zsadányi Armand	Rózsavölgyi és Társa	n.d.	ヴァイオリン+ピアノ	
Szól a nóta lkötet. 55 magyar nóta énekhangra és zongorára.	Lavotta első szerelme	Kossovits József	Dévény Jenő	Zeneműkiadó	1958	歌とピアノ伴奏	歌詞は Salver Béla
Kossovits-Kun Szerenád a Tisza-ház előtt (Lavotta első szerelme). Millennium Series.	Szerenád a Tisza-ház előtt	Kossovits József	Kun László	Edition Neuma	n.d.	リプリント?	弦楽四重奏
Kossovits József Lavotta első szerelme (Bihary Z.) két hegedű-zongora.	Lavotta első szerelme	Kossovits József	Bihary Zoltán	Edition Neuma	n.d.	リプリント?	ヴァイオリン×2+ピアノ
Lavotta Album hegedűsöknek	Lassú magyar. Első szerelem	Lavotta János	記載なし	Edition Neuma	n.d.	リプリント?	ヴァイオリン・ソロ Doppler によると記された friss 1 と 2 が続けて収められている

表 《ラヴォッタの初恋》掲載楽譜の詳細

この詳細から、

- ・さまざまな編成で楽しまれていた様子がうかがえる
- ・近年になってもリプリント版が出版される程度の需要があると推察できる
- ・作曲者をラヴォッタとしているものとコッショヴィチとしているものはほぼ同じだが、タイトルはほとんどが《ラヴォッタの(初)恋》を採用している。コッショヴィチと結びつくタイトルを冠しているものでも、カッコ

に入れた形で《ラヴォッタの初恋》のタイトルが挙げられている
といったことがらははっきりした。

なお、補足的に手持ちのCDや動画サイトなどを利用して、この曲が実際にどのように演奏されているのかを確認した。その結果、

- ・器楽曲として演奏されることも多い。その際、ジプシー楽団による演奏がもっとも多いが、ピアノ独奏、ソロ楽器とピアノ伴奏、ソロ楽器独奏など、さまざまな形態があり、楽譜でも多様な演奏形態で出版されていることと符合する
- ・大衆歌曲マジャル・ノータとしての録音も多い。その場合、「4. 《ラヴォッタの初恋》の背景」の最後に記した4通りの歌詞の全てを確認することができ、歌としても何通りもの楽しみ方で享受されている様子が確認できる
- ・いわゆる「ハンガリー風」に緩一急（一急）のスタイルを作るために、別々の曲をつないで演奏したり歌ったりする習慣がハンガリーの大衆音楽にはあり、楽譜⑦もそのようなスタイルで構成されていたが、録音・録画ではこの曲だけ（すなわち緩の部分のみ）で急速なテンポによる部分をつけないものが大半であった
- ・ジプシー楽団、マジャル・ノータのいずれもが1970年代後半ごろから急速に人気を失い、影響力が低下しているため、近年の録音・録画を確かめることができなかつた

という点を特徴として挙げるができる。

6. まとめと今後の課題

本稿ではヴェルブンコシュの「三大名人」であるビハリ、チェルマーク、ラヴォッタとの関わりの中で作られた楽譜と関連資料の調査から、一つの曲がどのような変遷をたどって人々の間に膾炙していくのかを、ラヴォッタと関連づけて普及した作品を例に、その曲と関わった人々、作者、楽譜出版の様子などをたどることで跡付けた。このような検証に、ロマたちの演奏習慣との照合、とりわけ現行のジプシー楽団とは演奏スタイルがかなり異なっていた歴史的な録音を用いての作業を入れ込んでいくことで、さらに「ハンガリー風」音楽が広まり、浸透していった様子を生き生きと感じ取ることができると予想している。

本稿の元となった研究では、年度の後半に積み残していた調査を実施することができず、それ以前の時点で次年度以降に既に持ち越しを決定していたツィンパロム、クラリネット選択の経緯を探求するという課題に加えて、演奏実践の調査も持ち越しとなった。楽譜資料とそれを音として実現していく際の演奏者側の創意、あるいは調整といった部分を知ることこそ、この種の音楽がハンガリー人の心の襞に入り込んでいった様子を、感性の面から理解するのに必須の作業である。この二つを次の課題としたい。

本稿は2019年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）による成果の一部です。貴重な研究の機会をいただいたことに対し、心より感謝いたします。

註

(1)ブラームスの一連の《ハンガリー舞曲》、リストの《ハンガリー狂詩曲》を例として挙げれば、その人気ぶりは理解できよう。

(2)「ジプシー楽団」は当時の北部ハンガリーに住んでいたツィンカ・パンナ Czinka Panna (1711?-1772) が18世紀前半に成立させたと伝えられるが、当初から居住地を支配する小貴族の Lányi János に奉仕する形で演奏活動を始めたこと

から、この種の楽団は貴族階級と切り離せない存在であったことが理解できる。

- (3) 打弦楽器のツィンバロムは、ジブシー楽団が成立したとされる18世紀中ごろにはハンガリーの貴族の間で愛好されていたことが知られている (Mandel, 2008, pp.50-51)。
- (4) ロマの出自をもつ音楽家。ジブシー楽団が成立して比較的早い頃の音楽家であり、彼と彼の楽団の演奏が王侯貴族にももてはやされたことによって、ジブシー楽団が当時のハンガリー音楽界を代表するかのごとき存在にまで押し上げたことで知られる。北部ハンガリー (現在のスロヴァキア) から1802年にベシウト (現在のブダペスト=ブダペシュトの一部) に活動の拠点を移して以降、広く聴かれるようになった。
- (5) 出自に関して詳しいことは分かっていない。ウィーンでヴァイオリン教師を務めた後に1790年代にハンガリーに行くとみられている。1802～1803年のいずれかの時にゲデッラーでビハリの演奏を聴く機会があり、ハンガリー風の作品を手掛けるようになり、中には出版されるものもあった。ウィーン、ロシアの宮廷で演奏したとの記録もある。
- (6) ハンガリーでもかなり古くまで祖先をたどることのできる由緒ある家系の出身で、役人であった父とともにポジョニ (現スロヴァキアのブラチスラヴァ)、ベシウトで教育を受け、法律も修めたとされる。兵役に就いたのちに役人となったが、1792年頃より音楽を専業とし、劇場の音楽監督、指揮者、ピアノやヴァイオリン教師を務めるかたわら、ハンガリー風の音楽の創作にも従事した。音楽家としての活動はおおよそ25年間ぐらいと見られるが、ビハリ、チェルマークと違い、音楽家として確立した地位につき、生前にその作品が出版されていたという点で前二者と異なっており、存命時から死後まで長く影響力を持っていた。
- (7) Sárosi, 2002, pp.28-29.
- (8) ハンガリーの著名な伯爵家の出身で、ピアニスト、作曲家、音楽評論家として活動した。リスト、タールベルク、エルケル、ドップラーなど一流音楽家と強い結びつきがあった一方で、ハンガリーの大衆音楽の初期名人であるビハリ、チェルマーク、ラヴォッタの作品をピアノ2手、4手用に自ら編曲して出版するなど、大衆音楽の領域にも強い影響力を持っていた。
- (9) ここでの生没年は *Zenei Lexikon* 2, 1984, p.343の コッショヴィチの項目における記載に拠った。なおコッショヴィチの苗字 Kossovits には Kossowits, Koschovitz, Koschowitz などの綴りもある。
- (10) Domokos, 1999, p.17.
- (11) *Zenei Lexikon* 2, 1984, p.343.
- (12) フベル・シャンドル (1875-1945) は作曲家で指揮者。当初は音楽学校の教師を務めていたが、1910年代からカバレットなどで音楽監督として働くようになり、シャンソン、舞踊曲、マジカル・ノータといったレパートリーに作品を残している。主な作品は、この楽譜と同じ Rozsnyai Károly 出版社から発表されている。
- (13) ここでは Polifon Zeneműkiadó BT による1991年のリプリント版を用いた。この楽譜のオリジナル版が出版された際の住所がブダペストIV区の Mehemed Szultán út となっているが、この通りの名称は1915～1918年の間しか使われていなかったことから、この間の出版と判断できる。
- (14) テケリとラーコーツィを中心とした反ハプスブルク蜂起の出来事と人物を扱った叙情的な唄のカテゴリー。
- (15) この舞台作品はヘルツェグ・フェレンツ Herczeg Ferenc による作品で、1901年初演である。
- (16) 1885年以降1949年までの間の出版であることしか特定できなかった。なお、執筆者が所有しているのはこれに基づき Edition Neuma がリプリント版として出版したものである。
- (17) 生没年不詳。ガルガヘーヴィーズ Galgahévíz にゆかりの作曲家、ヴァイオリニストで、主として初期名人伝とされる作品を (主に自らの演奏のために) 収集し、編曲して出版したことが知られている。主要な曲集としては全64巻から成る Régi magyar zene gyöngyei というタイトルのパート譜のシリーズがある。自作にも現在まで演奏される作品が含まれる。
- (18) 社会主義化したハンガリーにおける唯一の音楽出版社であったが、1994年に私有化された。

- (19) クンは作曲家、指揮者、ツインバロム奏者で、作曲家としては舞台作品の他に大衆歌曲、歌曲作品の編曲がある。
- (20) 生没年、経歴等は不明。この人物による他の編曲楽譜のオリジナル版にも出版年の記載がないが、その体裁から20世紀前半ではないかと思われる。
- (21) 最後の「Szigetvár ostroma」は全8曲の組曲。
- (22) この Doppler が《ハンガリー田園幻想曲》で知られるフルート奏者で作曲家のドップラー・フェレンツ Doppler Ferenc (1821-83) と同一人物を指すのかどうかは不明である。

主な参考文献

- 横井雅子 「「ハンガリー風」に取り込まれる楽師像を読み解く——予備的考察——」『音楽研究 国立音楽大学大学院研究年報』第30輯 2018年 101～106頁
- 横井雅子 「19世紀ハンガリー音楽のナショナリズムとロマ音楽—「ハンガリー風」に取り込まれる楽師像を読み解く—」『国立音楽大学研究紀要』第53集(2) 2019年 353～360頁
- Boronkay, Antal ed. *Brockhaus Riemann Zenei Lexikon 1*. Budapest: Zeneműkiadó, 1983.
- Boronkay, Antal ed. *Brockhaus Riemann Zenei Lexikon 2*. Budapest: Zeneműkiadó, 1984.
- Boronkay, Antal ed. *Brockhaus Riemann Zenei Lexikon 3*. Budapest: Zeneműkiadó, 1985.
- Dombóvári János. *Pusztafedémestől Tállyáig. Monográfia Lavotta Jánosról*. Miskolc: Szent Maximilian Lap- és Könyvkiadó, 1994.
- Domokos, Mária. *Lavotta János. Magyar zeneszerzők 6*. Budapest: Mágus kiadó, 1999.
- Frideczky, Frigyes. *Magyar zeneszerzők*. Budapest: Athenaeum 2000 kiadó, 2000.
- Kikli, Tivadás. *Magyar népdalok, énekesek és népdalok lexikona*. Szeged: Bába és társai, 1999.
- Leszler, József. *Nótakedvelőknek*. Budapest: Zeneműkiadó, 1986.
- Major Ervin. "Bihari műveinek tematikus katalógusa." *Zenei Szemle*. 5-7, 1928. Appendix.
- Mandel, Róbert. *Magyar népi hangszerek*. Budapest: Kossuth kiadó, 2008.
- Markó, Miklós. *Cigányzenészek albuma*. Budapest: Private edition, 1896.
- P. Eckhardt Mária. *Csermák-művek egy varsói kéziratban*. MTA Zenetudományi Intézet, 1981.
- Papp, Géza. *A verbunkos kéziratok emlékei*. Budapest: MTA Zenetudományi Intézet, 1999.
- Sárosi, Bálint. *Bihari János. Magyar zeneszerzők 21*. Budapest: Mágus kiadó, 2002.
- Sárosi, Bálint. *A cigányzenekar múltja az egykorú sajtó tükrében 1776-1903*. Budapest: Nap kiadó, 2004.
- Sárosi, Bálint. *A cigányzenekar múltja Az egykorú sajtó tükrében II. 1904-1944*. Budapest: Nap kiadó, 2012.
- Sárosi, Bálint. *Dudások, cigányzenészek. A hangszeres magyar népzenei hagyomány*. Budapest: Nap kiadó, 2019.